様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０４８２
研究課題名（和文）　ライフストーリー・アーカイヴ現象にみる＜個人の歴史化＞と世代継承性の経験的研究
研究課題名（英文）　Empirical study on the 'historicization of the individual' and generativity in the phenomenon of life story archives
研究代表者
小林　多寿子（ KOBAYASHI TAZUKO ）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：５０１９８７９３

研究成果の概要（和文）：1990 年代以降に顕著になったライフストーリー・アーカイヴ現象をアーカイヴ実態調査とアーカイヴ化比較調査を通して得た具体的なケースからその実際を検討した。公的機関による戦争体験のアーカイヴ化や自治体による自分史アーカイヴ、地域に根ざした自分史サークル活動のなかで生まれた自分史図書館というケースの検討から、現代日本のライフストーリー・アーカイヴ現象が示す＜個人の歴史化＞の諸相と世代継承性の特徴をあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：The actual situation of the phenomenon of archiving life stories, which has emerged since the 1990s, was investigated through archival research and comparative study in Japan and the United States. Three cases, the archiving of wartime experiences by the Okinawa Prefectural Archives, the archiving of autobiographies by the local government of Kasugai City, and the private library for autobiography established by a voluntary group for writing autobiographies based in the local area of Yame, Fukuoka, are examined. Several aspects of the 'historicization of the individual' and generativity are presented as the points of issue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：経験社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：ライフストーリー、アーカイヴ、オーラルヒストリー、個人の＜歴史化＞、世代継承性、質的研究

１．研究開始当初の背景

戦後日本社会における個人的経験を書きあらわす展開をみるとき、1950 年代に隆盛した生活記録運動をはじめとして 1960 年代終わりからの「ふだん記」運動、1980 年代後半から顕在化する自分史ブームという文章運

動や流行現象の流れのなかで「生活記録」「自分史」「体験記」「ふだん記」「回顧録」「闘病記」等々、さまざまな言葉であらわされるライフストーリーが数多く産出されてきた。このような個人的経験を書きあらわす動向をあきらかにし、その意義を検討する社会学的研究を研究代表者は継続してきた。そのなかで、半世紀のあいだに産出された膨大なライフストーリーはどこでどのようになっているのか、作品としてのライフストーリーはどこへいくのかという新たな問いに直面している。

その問いの背景には戦争体験のアーカイヴ化とオーラルヒストリー・プロジェクトの進行という二つの動向がある。一つには、戦後 50 年を迎えた 1990 年代半ばから戦争体験者の急速な減少と連動して戦争体験の記録保存への志向が増し、戦争体験記の収集公開をめざす戦争体験のアーカイヴ化が顕著になっている。二つには、歴史的出来事の証言や人びとの＜声＞を残すオーラル・アーカイヴの取り組みが各地で進んでいる状況がある。アーカイヴ化をめぐっては、戦争体験という歴史的出来事の記録を人びとの＜声＞で残すというオーラルヒストリー・プロジェクトはとりわけ欧米で目立つ動向であるが、国内でもいくつかのオーラル・アーカイヴの取り組みが知られている。このように戦争体験のアーカイヴ化とオーラルヒストリーのプロジェクト化の進行という動向を背景として、ライフストーリーが集積される状況を把握し、その意義を考える社会学的研究が立案された。

２．研究の目的

本研究は、戦後書かれたライフストーリー作品のゆくえをたどり、ライフストーリーがどこでどのような場所を占め、いかなる意義をはたしているのかを社会学的に調査研究する必要性のもとで企画された。1990 年代後半以降、多くのライフストーリーが集積される動きが多方面でみられるようになった状況をライフストーリー・アーカイヴ現象として注目し、その実際を明らかにすることが本研究の第一の目的である。とくにライフストーリー・アーカイヴ現象を牽引する戦争体験のアーカイヴ化がさまざまな機関でみられるようになっている現状を調査し、ライフストーリーとしての「戦争体験」が歴史的出来事の「証言」として位置づけられて「記録として残す」アーカイヴの対象となっている実態をあきらかにする。

さらに、＜個人の歴史化＞と世代継承性（ジェネラティヴィティ）という観点から検討することでライフストーリー・アーカイヴ現象の社会学的意味を解明することをめざしている。半世紀のあいだに生みだされた膨大な自伝的ライフストーリーはどこに居場所を得ているのか、アーカイヴ化はライフストーリーによる＜個人の歴史化＞を促し「歴史」へと導くのか、「個人的経験の語り」から「歴史」へいかに接続され、ライフストーリーの世代継承性が有効化されているのか、さらにアーカイヴ現象は「生きられた記憶」の消滅への危機感という歴史的社会的状況といかに連動しているか、これらの問題を解明することを目的としている。

３．研究の方法

本研究は、戦争体験記や自分史や生活記録等も含めたより包括的なライフストーリー、オーラルもリテラルな、つまり文字で書かれたライフストーリーも、さらに書物化されたライフストーリーもひろく対象とし、日本におけるアーカイヴ実態調査と国外の事例をみるアーカイヴ化比較調査という二つの調査を柱として取り組んでいる。

(1) アーカイヴ実態調査

戦後の文章運動のなかでも大半のライフストーリーは、自費出版であれパソコンによる自作であれ紙媒体で記され、冊子・書物形態という物質化されたライフストーリーが多産されてきた。そこでライフストーリー・アーカイヴ化はライフストーリーの書物化と連動した現象として考え、その書物化のきっかけによって、アーカイヴ化を①文章運動系、②自費出版に関わる出版系、③広くライフストーリーを集積しようする独立系、という３つのタイプでとらえ、アーカイヴ実態調査を企画した。アーカイヴ化の意図や現況、今後の展望を把握し、関係者へのインタビュー調査によりライフストーリー観や世代継承性の考えをとらえようとした。

(2) アーカイヴ化比較調査

ライフストーリー・アーカイヴ化は、日本に限らず欧米でも顕著な現象である。ピエール・ノラが『記憶の場』2002 で「われわれの生きているこの時代ほど記録を残そうという意志をもった時代はなかったであろう」と述べ、博物館や図書館、文書観，資料センターの制度化が「伝統的な記憶の消滅」と連結していると指摘したが、このような歴史的状況とアーカイヴ現象の連動を本研究の前提として考えている。そこで米国における二つのアーカイヴ化の例を現地調査し、日本におけるアーカイヴ化と比較して考える。具体的には米国の日系アメリカ人コミュニティで進められている Densho プロジェクトというライフストーリーのデジタル・アーカイヴ化状況と南メーン大学のライフストーリー・センターである。

この二種類の調査は、いずれも現地で関係

者へのインタビューと書かれたドキュメント資料の収集という質的調査方法を主としておこなった。具体的な調査対象はつぎのとおりである。

(1) アーカイヴ実態調査

①アーカイヴ機関調査―戦争体験記のアーカイヴ化の実態について、広島の国立広島被爆者追悼祈念館、沖縄県では沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県公文書館で体験記や証言の収集・保存・公開について聞き取りをおこない、公的機関における個人の体験や証言のアーカイヴ化実態調査をおこなった。

②ライフストーリー・アーカイヴ実態調査―従来の文章運動系とも自費出版系とも異なる独自の動向を見せる独立系のライフストーリー・アーカイヴとみなされる事例にとくに着目し、愛知県と福岡県において実態調査に取り組んでいる

(2)アーカイヴ化比較調査

米国シアトルにおいて Densho、メーン州の南メーン大学でポール・アトキンソンによるライフストーリー・センター、これら二つのライフストーリー・アーカイヴについて主宰者にヒアリング調査をおこなった。いずれもデジタル・アーカイヴ化の先行例であるが、とくに Densho は、日系アメリカ人の第二次世界大戦中の強制収容体験のデジタル・アーカイヴであり、日本の戦争体験アーカイヴ化との比較を念頭において調査を実施した。

また北欧でライフストーリー活動がさかんであることを受けて、ストックホルムとヘルシンキでも関係者にインタビュー調査を実施している。

４．研究成果

(1)アーカイヴ実態調査と(2)アーカイヴ化比較調査で得た具体的ケースからライフストーリーのアーカイヴ化の諸相とライフストーリー・アーカイヴ現象がもつ意味について検討した成果は、以下のとおりである。とくに(1)－① 公的アーカイヴ機関調査と(1)－② ライフストーリー・アーカイヴ調査から、つぎの３つのケースをあきらかにする。

A. 春日井市のケース―自治体による自分史アーカイヴと自分史活動

愛知県春日井市は、1999 年、新しい文化施設である文化フォーラム春日井の完成を機会に独自の文化事業として自分史事業の推進を打ちだし、日本自分史センターを設立して自分史作品の収集・収蔵に取り組みはじめた。自分史事業に関わる自治体としては、自分史文学賞を設けている北九州市に次いで全国で二番めの自治体である。春日井市の自分史事業では、自分史作品の収集収蔵、自分史講座の開講、自分史相談事業、自分史イベントの開催等があげられるが、なかでも①日本自分史センターにおける自分史収集・収蔵を進める自分史アーカイヴと②自分史サークル活動の推進という二つの柱が注目される。

日本自分史センターが所蔵する自分史は 2011 年 5 月現在、総数 9714 冊であり、1 万冊に達しようとしている。そのうち春日井市の著者は 6.35%、愛知県内在住者が 2.9%、合わせても蔵書全体の 9.2%で、1 割に満たず、「日本自分史センター」という名称のとおり全国から自分史作品を収集している。

収蔵されている自分史の特徴は、年齢別著者数をみると、70 代が一番多く 32.9%、次いで 60 代 29.3%、80 代 16.1%で、60 代 70 代 80 代で合わせて 78.4%と、高齢期の著者数が 4 分の 3 以上を占めている。また著者の性別では、男性 63.3%、女性 36.7%と女性の著者数が男性の著者数の約 6 割であり、自分史を書く人の年齢層と性別の特徴がでている。加えて、所蔵作品の 33.5%がグループあるいは共著によるもので、自分史の書き方スタイルとして「ともに書く自分史」の作品が３分の 1 を占めていることがわかる。

春日井市の自分史事業のもうひとつの柱である自分史サークル活動では、文化フォーラム春日井において自分史講座の開講と８つの自分史サークルの継続的活動が注目される。そこで自分史サークルのうち６つのサークル代表者へインタビュー調査をおこない、自分史活動の実態と自分史作品の産出が連動している状況をあきらかにした。その結果、自分史講座から自分史サークル活動へ連続的に移行し自分史が書き続けられること、サークル活動における自分史の作品化では印刷製本の場が提供されていること、作品が自分史センターでアーカイヴ化されること、このような条件が自分史活動の継続と自分史作品の産出につながっていることがあきらかになった。

自治体による自分史事業のなかで自分史サークル活動による自分史作品の産出とつながるアーカイヴの状況があきらかになった。

B. 八女地域のケース―自分史図書館と「人生史サークル黄櫨の会」

福岡県筑後市の自分史図書館は、八女地域（八女市・筑後市・広川町）における「人生史サークル 黄櫨の会」の活動のなかで 2005 年に開設された、ボランタリーな私設のアーカイヴである。

自分史図書館の『蔵書目録』(2009 年 6 月現在）によると、収蔵数は 2301 冊である。作品のインデックスによれば、①自分史 21.6%、②郷土・歴史 11.7%、③戦記 5.8%、④創作 14.6%、⑤歌集・句集・詩集 17.1%、⑥教育 3.2%、⑦記念誌 7.8%、⑨資料 15%、⑨

黄櫨の会作品 2.3%　という蔵書構成である。その特徴として、作品内容が自分史や戦争体験記、そして歌集・句集・詩集というライフストーリー作品が主であること、ローカルな出版社で自費出版された作品が多いこと、そして全国からの寄贈によって収集が進んでいることがあげられる。

「黄櫨の会」という自分史を書くグループは、1997 年に八女地域の約 200 人が集まって設立された。会則には「本会は、人生史の学習・執筆などを通して、これまでの自分を見つめ直し、これからの人生にいきいきと挑戦していく活力と生きがいを創っていくことを目的とする」とあり、学ぶことと書くことを活動の中心にしている。毎月 1 回、文章講座を開くほか、1 年 3 回、会員が文章を寄せた冊子を刊行している。

インタビュー調査では黄櫨の会代表者、文章講座の講師を長年続ける大学教員、機関紙の編集委員長、事務局担当、そしてとくに女性会員にインタビュー調査をおこなった。10 年以上続く自分史活動で生みだされた作品には八女地域に生きる人たちの人生が豊かに描かれているが、このような執筆を可能にするこの地域におけるリテラシーの高さが際立っている。ライフストーリー・アーカイヴとして自分史図書館が成り立っている基盤には、自己表現のリテラシーの高さと連動して、他者の自分史作品も評価し、自分史作品を次世代へ伝えたいという意識があらわれている。自分史図書館はライフストーリーを書く活動とつながった私設のライフストーリー・アーカイヴとして国内ではもっとも注目される。

C. 沖縄県公文書館のケース―公的アーカイヴ機関における戦争体験記録としてのオーラルヒストリーとアーカイヴ化

沖縄県公文書館で所蔵する宮城聰文書(So, Miyagi, 1892-1991)のなかに、琉球政府時代の 1971 年に刊行された『沖縄県史』第 9 巻「沖縄戦記録Ⅰ」の元になったインタビューテープが含まれている。『沖縄県史』第 9 巻は、沖縄の歴史にとって重要な位置をしめる沖縄戦をオーラルヒストリーをもとに描く歴史書である。そのオーラルヒストリー・インタビューは沖縄戦体験を語る声としてデジタル化され、語り手の許諾を得て公開されはじめている。これは地方の公文書館が県史の元になった個人のオーラルヒストリーを声のまま保存・公開するものである。その語りの声を声のままで聴くことができるオーラリティを尊重したデータの保存公開であり、地域に根ざしたオーラルヒストリー・アーカイヴの一例といえるだろう。『沖縄県史』第 9 巻には 211 名の体験記録があり、録音されたのは 250 名以上あるが、許諾公開は 2010 年 3 月時点で、3/4 に及んでいる。デジタル技術の発展を受けた地域の歴史とつながるオーラルヒストリー・アーカイヴ化の試みのケースとして評価される。

以上の 3 つのケースをもとに本研究で得られた要点を三つにまとめる

一、アーカイヴ化は地域のライフストーリー生産活動と連結したものとして、そしてアーカイヴとは現在進行形で動く実践活動と連携するものとしてとらえられる。たんにひろく多くの作品を収集するというのではなく、地域で書かれるライフストーリーと連結させてアーカイヴ化が進められる。

二、アーカイヴ化によって個人のライフストーリーが保存公開されることは、書き手自身にとってはその作品が読まれる可能性、そして書き手の人生を超えて作品が残っていく可能性が担保されることになる。個人の人生を超えて読まれ理解されるとき、そこに個人が「歴史」の一部になっていくという意味においてライフストーリーをとおした＜個人の歴史化＞をみいだすことができる。ライフストーリーが読まれるとき、先行世代の「生きられた経験」が後続世代に理解される契機が生じ、そこに世代継承性がみいだされる。

三、ライフストーリー・アーカイヴ現象とは、たんに自分史や体験記などを収集・収蔵するだけではなく、地域でおこった歴史的出来事や地域で生きる人の人生と不可分のものである。ライフストーリーの集積は地域での個人の「生きられた経験」の集合であり、個人的経験が集積されることによって「歴史」へ接続していく場になっている。

本研究はこれまでの生活記録運動、「ふだん記」運動、自分史ブームという戦後の系譜に沿った研究の成果を踏まえ、自己表現力としてのリテラシーを促進した文章運動や自分史活動がその結果として産出した大量の自伝的ライフストーリーが新たなアーカイヴ化の動きを招来している現象をあきらかにしてきた。そしてライフストーリー・アーカイヴ現象には、ライフストーリーをあらわすことが「現在の状況に歴史を与える」（ガーフィンケル 1967）実践であるだけでなく、個人的経験を「歴史」に結びつける＜個人の歴史化＞の作用のあることがあきらかになった。そしてライフストーリー・アーカイヴは個人の寿命を超えて個人の人生を「歴史の領域」に連結させていく。アーカイヴによる保存公開が読書を招来するとき、アーカイヴは個人的経験を歴史的出来事に結びつけるだけでなく、個人的経験を次の世代へ伝達継承可能なものにする世代継承性の働く場になる。ライフストーリー・アーカイヴ現象をめぐっては、エリクソンの概念をライフストーリー論で読み替えた D･ベルトーのいう「世代継承性ジェネラティヴィティ」という視角が有効であるが、本研究で得たデータの分析

をさらに進め、解釈を充実させていくことが今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①小林多寿子、オーラルヒストリーと地域における個人の<歴史化>、三田社会学、査読無、第 15 巻、2010、3-19 頁
②小林多寿子、声を聴くこととオーラリティの社会学的可能性、社会学評論、査読無、第 60 巻第 1 号、2009、73-89 頁
③小林多寿子、オーラルストーリーと個人の「歴史化」―ある日系アメリカ人一世の「ライフ」への視点―、フォーラム現代社会学、査読無、第 7 号、2008、49-61 頁
④小林多寿子、自己を書くことと記憶―アルヴァクスの自伝的記憶―、心理学評論、査読有、第 51 巻第 1 号、2008、184-195 頁

〔学会発表〕（計３件）
①小林多寿子、オーラルヒストリーとアーカイヴ化の問題―社会学からの議論―、日本民俗学会国際シンポジウム、2010 年 9 月 20 日、成城大学
②小林多寿子、オーラルヒストリーと地域における個人の＜歴史化＞、三田社会学会、2009 年 7 月 11 日、慶應義塾大学

〔図書〕（計４件）
①小林多寿子編、『ライフストーリー・ガイドブック―ひとがひとに会うために―』、嵯峨野書院、2010, 400 頁
②小林多寿子、他、「18 成熟のドラマ―D.W.プラース『日本人の生き方』」、『日本の社会と文化』、世界思想社、2010、271(177-186)頁
③小林多寿子、他、「ライフストーリー法－いかに『具体的な人間』を描くことができるのかー」、『質的調査の方法』、法律文化社、2010、157(71-83)頁
④小林多寿子、他、「ミニドカを語り継ぐ―日系アメリカ人のインターメント経験とジェネラティヴィティ―」、『過去を忘れない―語り継ぐ経験の社会学―』、せりか書房、2008、244(20-34)頁

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　多寿子（KOBAYASHI TAZUKO）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：50198793